



初期のハンゲル図書収集と利用状況

花房征夫

●初訪韓のハンゲル図書収集

二万数千冊ものアジ研ハンゲル資料の中で、韓国人から「羨望」で眺められる一冊がある。抗日独立運動家「金九」の自叙伝『白凡逸志』の初版本がそれで、裏表紙には白凡（金九雅号）が知友に謹呈した「親筆」が刻されている。二〇〇九年二月、平凡社元編集幹部らの「東アジア出版人会議」は、この地域の人々が読むべき「東アジアの一〇〇冊」を発表したが、韓国編二五冊の最初に挙げられている書物は『白凡逸志』である。

このように『白凡逸志』は韓国人には特別の書であるが、刊行は解放直後の一九四七年なので初版本は珍しい。いわんや親筆本は文字通りの稀覯本である。その貴重書がアジ研では「普通の本」として配架されているのに驚くのか、取材の韓国人ジャーナリストや放送人などは何回もこの書に触れてアジ研図書館を紹介してくれた。

『白凡逸志』は初訪韓の一九六八年一月、確か二〇〇〇円弱で古本屋で買収求めたものである。六〇年代後半のソウルは今では

想像が難しい貧しい時代で、電力不足で繁華街で停電騒ぎが起きたし、「飢餓脱出」の大活字が連日紙面で踊っていた。この時私に韓国書を教えてくれた恩人は古本街の人達で、私はこの訪韓を機に彼らと知り合っており、終生の関係を結ぶ古本屋が何軒かできた。

この初訪韓は一〇日ほどで、国立中央図書館やソウル大学などの主要図書館を訪ね、指導的な韓国図書館員にも挨拶できた。しかし主な業務は未所蔵状態のハンゲル書収集で、基本的経済書など一〇〇〇冊ほど収集できた。価格は安くて五〜六〇〇円で韓国書一冊が買えた。そんな中の一冊が前述の『白凡逸志』で、この他にも解放直後の図書は多く、来所の韓国人研究者から「この書はどこで」と尋ねられことも珍しくなかった。

ちなみにこの時の図書収集は凍り付く恐怖の中で進行した。その一つの事件が一九六八年一月二二日の韓国大統領官邸・青瓦台付近で起きた南北軍人銃撃事件で、その時聞いた銃声ははまだ脳裏に焼き付いている。第二は、その恐怖の朴大統領襲撃未遂事件のわずか二日後の一月二三日、北

朝鮮東部主要港の元山沖合で勃発した米国の情報収集船プロボロ号の拿捕事件である。このとき佐世保港から米空母エンタープライズがプロボロ号乗務員八〇名を救援するため「日本海を北上中」という韓国のラジオニュースに接し、「米朝戦争再来」を覚悟せざるを得なかった。こうして韓国資料現地調査の後半は台湾に出国する日まで超緊張が続いた。その後、筆者は香港に出て小島麗逸研究員と合流して中国書の収集事務を分担した。業者は「遠東書店」で、混乱の中国から持ち出された文革資料などを専門的に集めていた。

●日韓基本条約が図書館利用の追い風

破格にも見えた私達の資料収集では東畑精一所長の指導があった。東畑先生は現調挨拶に赴いたときも「いい図書館を作ってくれ。これは岸信介首相、直々の指示である」と激励された。岸首相は満州国時代の行政経験のためか「わが国とアジア諸国との外交、経済などの戦略的提携問題では国家レベルのアジア図書館が不可欠」と述べ

て、実現を東畑先生に託されたのである。ジェトロとの統合前の「アジア経済研究所法」の業務項目の最初には確か「アジア地域の資料収集」と書かれていたが、これには半世紀前、日本の最高指導者岸首相と社会科学関係学会の総意がこめられた言葉である（この条項は現ジェトロ法にも継承されている）。

その後、研究所図書館はアジア諸国の体系的な新聞・雑誌収集、現代経済中心の資料構成、機能的なアクセス・システムの採用などで急発展した。朝鮮半島事例でいえば、一九六五年の日韓基本条約締結は大変な追い風になった。六一年に登場した朴正熙政権は幾つかの曲折を経て、日本からの請求権資金を外向き型経済発展に投入する国家方針を策定し、無償三億ドル、有償二億ドル、商業借款三億ドルの請求権資金の殆どを経済建設に投入した。韓国国家予算が三億ドル強の時代であったから、日韓の貿易、金融、人的往来は一挙に拡大した。そのため研究所の韓国関係利用者は急増し、何人ものビジネスマン、ジャーナリストなどが図書館常連客になった。彼らは『朝鮮日報』、『東亜日報』などの新聞、『韓国銀行調査月報』、『経済開発関係の資料』などを定期的にサーベイする人達であった。そんななかで現代韓国問題を調べる研究者、学生達らも増えた。また他図書館にはない韓国の有力紙『東亜日報』『朝鮮日報』のマイクロフィルム（バックナンバー版）を

求めるユーザーが定着し、やがて幾多の植民地期の論文、文学書、大衆歌謡書などが誕生した。

●海外利用者の増大

想定外の事態は韓国の大学教授、ビジネスマン、研究者らの相次ぐ来所であった。朴政権は米国の要請で一九六五年、ベトナム戦争に介入したが、その結果ベトナムを含めた東南アジアからのゼネコン受注が増えた。しかし韓国は東南アジアに関する基本的な経済資料を殆ど保持していなかった。そこで、アジ研所蔵の国連アジア太平洋経済委員会（ESCAP）作成の「メコン開発」資料などは何回も閲覧された。そして八〇年代から韓国人の主要対外関心は中国にシフトしていく。そんな中で韓国要人の訪問も珍しくなく、後日、大統領に就任する金大中氏を六七年、図書館に案内している。

アジ研とソウル大学経済学部との研究交流、全刊行物交換協定などを結ばれた李賢宰ソウル大学社研所長（その後ソウル大総長、首相、学術院長歴任）は、アジ研関係者の大恩人であるが、その李所長がアジ研に見えた日は七三年八月八日であった。日時を記憶しているのはこの日、日韓関係を震撼させた金大中事件が起きたことによる。

八〇年代前半からは中国大陸の朝鮮問題研究者がアジ研に現われた。最初の人物は中国の朝鮮研究メッカである國務院傘下の研究機関「現代国際関係研究所」の朝鮮室

長李章煥先生で、一九八四年、国連資金で東大に來られた直後、閲覧カウンターを挟んで面識した。李先生は延辺朝鮮族自治州の出身者で、朝鮮語はいうまでもなく、満州国時代に日本人に師事した関係で日本語も上手であった。そんな関係で高尾山などに何回もハイキングしたが、やがて李先生は八七年、アジ研코리아関係者を故郷延辺に招待し、中国の朝鮮問題研究家の紹介とともに、中、朝、露の三国国境と北東アジアの霊峰長白山（朝鮮名白頭山）の登山を引率してくれた。われわれは対外開放後、延辺に最も早く入った外国人であった。

同じ頃のカーター・エックカート先生（ハーバード大学韓国研究所長）の出会いも忘れられない。アジ研に現れたエックカート先生はまだワシントン大学（シアトル）の中年大学院生で、韓国資本主義の起源を植民地期の民族企業・京紡に求める博士論文を執筆するため、東大図書館や国立国会図書館などにある朝鮮総督府関係産業資料を探していた。日本の図書館は資格のない外部者にはハードルが高いので、大学図書館の利用問題や複製許諾権処理などで二年間ほど協力した。エックカート先生はその後『*Of Spring of Empire*（翻訳書名：日本帝国の申し子）』を刊行して米国アジア学会賞を受賞し、ハーバード大の韓国学主任教授に抜擢された。

（はなぶさ ゆきお／東北アジア資料センター代表）